

令和6年度 小平市立小平第七小学校 学校評価報告書								
学校教育目標		本校及び地域社会の実態に基づき、「よく考える子」「いつも元気な子」「こころのやさしい子」の育成を目標に掲げ、その達成に努める。						
目指す学校像(ビジョン)								
【目指す学校像】		こどもも大人も笑顔と思いやりがいっぱいの学校						
【目指す児童・生徒像】		◎よい考えいっぱい:他者と考えを深め合える子 ○あいさついっぱい:すすんで行動しようとする子 ○思いやりいっぱい:相手の気持ちを考えられる子						
【目指す教員像】		○児童を心から慈しみ理解し、よさや個性を引き出し、伸ばす教職員 ○自らの課題を認識し、日々研鑽に努めると共に、協働して磨き合う教職員 ○地域を愛し、地域や保護者と共感し、積極的に対話しながら地域や保護者からの信頼に応える教職員						
前年度までの学校経営上の成果と課題								
〈成果〉①学習者用端末を含むICT機器の活用により、学力向上につながる授業改善を行うことができた。 ②校内研究の「書く力」に関する取組により、児童の書くことに対する意識を高めることができた。 ③保護者・地域との連携を図って教育活動を進めることができた。 〈課題〉①教科担任制と校内研究の取組を通して、児童の学力や表現力を伸ばす。 ②体力向上への意識を高める。 ③心の教育の更なる充実を図り、SNSの問題などの未然防止につなげる。								
	具体的方策	第1回評価		成果・課題・対策	第2回評価		学校関係者評価 (○成果 ●課題)	成果・課題・次年度以降の対策
		取組指標	成果指標		取組指標	成果指標		
学力向上	「計算クエスト」等の実施や学習者用端末等ICT機器等を活用した授業を行う。また、高学年における教科担任制により、教科指導の充実を図る。	4	4	「学習者用端末を使うと学習が分かりやすい」と答えた児童が約9割となっている。今後も、活用方法を広げていく。高学年の教科担任制については、9割の児童が「分かりやすい」と答えている。教員それぞれの専門性を活かした授業を今後も続け、児童がより楽しく学ぶことができる環境を整えていく。	4	4	○効果的にICT機器の活用が図られており、児童の集中を途切れさせない工夫が随所に見られた。 ○教科担任制は、児童の学びの質の向上につながるとともに、教員にも、専門性を高める時間の確保等による良い影響が期待できる。 ●書く力や自分の考えを表現する力を伸ばすための言語活動の充実をさらに図っていくべきである。	「お子様は、文字や文章の読み書き、計算の仕方など学校で学習した内容を理解している」という設問について、保護者の肯定的回答率が5ポイント上昇した。授業でのICT機器の活用や高学年の教科担任制の実施が、学習理解の成果として表れている。今後も、児童が楽しく学ぶことができるよう、授業改善に努めていく。
	「こだいら特活の日」の取組を生かし、年間を通して各学級で話し合い活動を行い、他者の考えを受け止め、自分の考えを表現する経験を積み重ねる。	4	4	学級会については、全ての教員が取組を進めている。話し合い活動で、友達の見意をよく聞き、受け止めることは9割以上の児童ができていますが、自分の考えを発表することができていると答えた児童は8割弱にとどまる。今後は、事前のカード記入や、小グループでの話し合いといった手立てを実践していく。	4	4	校内研究の取組を進め、全ての学級で、年間を通して学級会を実施した。他教科でも、学習の中で話し合い活動が自然と見られたことが成果である。しかし、自分の考えをもち、発表できていると答えた児童は8割に届いていない。今後は、学習でペアや小グループでの意見交換を多く取り入れ、自信をもたせていく。	
健全育成（いじめ防止）	いじめ防止アンケートの活用や児童の実態把握を日々行い、いじめ対策委員会を中心に組織的にいじめ防止の取組を推進する。また、「特別の教科 道徳」や「こだいら特活の日」を中心に、心の育成に取り組む。	4	4	「困ったことがあったら相談できる人がいる」と答えた児童は8割となっている。また、自分との違いを理解して友達と関わっている児童は約9割となっている。保護者も、9割以上が「人との関わりを通して、思いやりの心が育っている」と答えている。今後も、道徳の学習等を通して、心の育成に取り組む。	4	4	○いじめが起きる前から、教員が児童や保護者とのコミュニケーションを大切にしていることが役立っている。 ○学力調査の自己肯定感に関する項目で、全国や東京都より10ポイント高い結果が出るなど、これまでの取組の良い成果が見られた。 ●学期初めに、染髪や服装が気になる児童が多く見られた。	「困ったことがあったら相談できる人がいる。」と考えている児童の割合と、「学校は、子どもたちにとって相談しやすい場になっている。」と考えている保護者の割合は、どちらも増えている。今後も、児童の悩みに寄り添いながら、適切な指導を行うことができるように、家庭との連携を密にしていく。
	あいさつ運動を行うとともに、七小スタンダードを基に、授業等の規律の定着に取り組む。また、行事等で積極的にチャレンジする機運を醸成する。	4	4	8割以上の児童が「先生や友達にすすんであいさつをしている」と回答しており、日常の様々な場面で自然にあいさつができている。七小スタンダードを守っている児童は昨年度より6ポイント減少している。きまりを守る大切さを繰り返し指導する。また、行事を機にチャレンジする気運を高めていく。	4	4	挨拶や規律の順守、行事等での挑戦については、どの質問でも8割以上の児童が肯定的回答をしており、明るく健全に過ごしていることが分かる。しかし、挨拶については1回目のアンケート結果より数値が下がっている。今後も、特別な場面だけでなく、日常的な挨拶の指導に、全教職員で継続して取り組んでいく。	
体力向上	休み時間の外遊びを励行する。また、マラソンチャレンジやなわとびチャレンジ等の取組を通して、運動の日常化を図る。	4	3	児童の肯定的な回答が74%と低くなっている。6月末から7月にかけて気温の高い日が続き、熱中症警戒アラート発令により外遊びができない日が多くあり、その影響もあると考えられる。2学期には運動会も予定されているので、外遊びを励行し、児童の体力向上に努めていく。	4	3	○食事や栄養に関する教育も充実しており、児童が明るく楽しく食事に向かうことができている。 ○運動会の開催時期を再考するなど、体力作りに十分な時間をかけ、児童のモチベーションと表現レベルを高めて実施できていた。 ●運動会で表現運動や代表リレーがなく、それらを楽しみにしていた児童の意欲低下が心配である。	「休み時間にすすんで運動や外遊びをしている」と答えた児童の割合は1回目のアンケート結果と比べて4ポイント増えており、長縄集会等の取組の成果が出ている。しかし、肯定的回答は8割弱にとどまり、天気の良い日でも、教室で過ごす児童もまだ多い。今後も、行事や集会等を機に、運動の日常化を目指して指導していく。
	養護教諭、栄養士、地域、企業、関係機関等と連携した健康教育・食育を充実させ、健康の保持増進について指導する。	3	4	保健だよりや栄養士による校内放送などを通じ、児童は、健康や食事に関する関心や意識を高めている。健康の保持増進に関わる設問の肯定的回答率は、児童が82%、保護者が78%となっている。引き続き、学校と家庭とが連携して、児童が規則正しい生活を送ることができるよう協力していく。	4	3	「毎日元気よく過ごすために、寝る時間や食事の仕方に気を付けている」と考えてる児童と、「こどもが、寝る時間や食事の仕方に気を付けている」と考えている保護者との間に4ポイントの差がある。児童が健康指導や食育で学んだことを普段の生活に生かしていくよう、生活点検表などの取組を継続し、規則正しい生活習慣を育んでいく。	
特別支援教育	学期に1回、特別支援に関する研修を行い、特別支援教育の指導方法・内容への理解を深める。また、校内委員会で、コーディネーターを中心に支援や指導方針を検討し、統一した対応をするための情報共有を行う。	4	4	保護者の「学校は特別支援教育の視点をもって、一人一人の状況に応じた指導をしている」という設問に対する肯定的回答は、昨年度と比べて6ポイント増加している。今後も、特別支援教室「はなみずき」と連携しながら、保護者とも情報共有を進めていく。	4	4	○特別支援教室では、個々の特性を尊重しながら、分かりやすく、児童が意欲的に学ぶことができるような内容で進められている。 ○教員が、特別支援教育の視点をもって、一人一人の状況に応じた指導を行っている。 ●年々対応が難しくなっている分野なので、研究を深めながら取り組んでほしい。	「学校は、特別支援教育の視点をもって、一人一人の状況に応じた支援や指導をしている」という設問に対し、「分からない」と回答した保護者の割合が6ポイント減っている。今後も、特別支援の視点をもち、全ての児童にとって学びやすい環境を整えていく。また、そのような取組を学校だよりや保護者会等で伝えていく。
	各関係幼・保、中学校と連携し、適切な就学及び小・中学校9年間を見通した教育を行う。	2	4	特別支援教育について、「関係機関と連携し、適切な就学及び小中9年間を見通した教育を行っている」と答えた教員の割合が7割弱と低くなっている。今後も特別支援校内委員会を中心に、児童にとってよりよい環境で力を付けられるよう、関係機関との連携、協議を進めていく。	4	4	小・中連携では学力向上に重点を置き、「話し合い活動」をテーマに検討を重ね、2学期には全学級で授業公開を行った。「学校は、地域の幼稚園・保育園・中学校と連携し、継続した教育を行っている」という設問で「分からない」と回答した保護者の割合が7ポイント減った。今後も、保・幼・中との連携について、発信を続けていく。	
地域連携	七小支援ネット、放課後子ども教室、CS、地域人材や関係機関などを、連携し、よりよい教育活動を展開する。	4	4	地域との連携について、教員と保護者の間にアンケート結果でやや差がある。昨年5月より、ゲストティーチャーの活用や、地域との連携が再びできる環境となった。地域や外部の力の活用は、児童の学習意欲や理解力の向上につながるため、過去の取組を引継ぐとともに、新たな取組も検討していく。	4	4	○様々な地域資源を積極的に活用しており、地域の様々な人と交流することで、児童に幅広く、良い経験をする機会を提供している。 ○青少対祭りや市民マラソンで、多くの教員が参加して応援してくれたことは、児童にとっても大きな力になった。 ●学年や教員で差がないように、連携の意識を統一してほしい。	今年度も、ゲストティーチャー、七小支援ネットや保護者と連携した学習を進めてきた。また、七小支援ネットによる校外学習での引率や校内環境の整備などでも、協働して取り組むことができた。さらに、CSと連携したキャリア教育の授業も新規に行うことができた。今後も、地域資源の活用について、検討を進めていく。
業務方改善・働き	欠席等連絡のデジタル化や会議の精選、学校行事の取り組み方の工夫により学年会を充実させ、児童と向き合う時間を確保する。	4	4	欠席等連絡のデジタル化や会議の精選、学校行事の工夫等により、業務の軽減を図ることができたと感じている教員が9割を超えている。働き方改革の意識は個人にも浸透し、9割以上の教員が肯定的な回答をしている。今後も、職場全体で知恵を出し合いながら、更なる業務改善に努めていく。	4	4	行事や校務の内容の検討、会議の精選や削減、欠席連絡のデジタル化などのICT機器の活用等を通して、全ての教員が働き方改革を実感することができた。個人として働き方改革を進めているか、という設問についても、肯定的な回答が9割を超えている。今後も、学校評価等での話し合いを通して、業務の在り方を検討していく。	